

あの日を振り返り 歩みだす

東日本大震災が発生して2カ月以上が過ぎ、本市では、復興に向けて少しずつ歩みだしています。人々は、あの日とどう向き合い、そして、どのように乗り越えようとしているのでしょうか。それぞれの思いや取り組みを紹介します。



東日本大震災により、田んぼも被害を受けました。米どころ大崎市のおいしいお米を育てるには、田んぼの復旧作業が急務。田植えが早くできるように、懸命に作業が行われました（5月中旬）。

避難所を支えた自主防災組織

三月十一日、地震発生直後は、地域で一人暮らしをする高齢者の無事を確認するため、私たちが地域内を駆け回りました。

幸い、大ケガをした人はいませんでしたので、その後災害時の避難所となつている古川工業高校体育館に集まりました。電気が止まり、電話もつながらず、情報がまったく入ってこないという状況だったので、もしかして被害があつたために自宅で過ごせない人もいるかもしれない。そのような事態を想定し、古川工業高校の先生と協力し、体育館に畳をしいて寝床を確保するなど、とにかく急いで避難所開設に向けて準備しました。

旧国道四号沿いの大きな避難所ということもあり、不安を感じた自分たちの地域はもちろん、隣の地区、たまたま旅行や仕事で大崎市に訪れ帰ることができなくなった人など二百人以上が避難所に集まり、一夜を明かすことになりました。

本格的に活動が始まったのは、翌日からです。私たちは、組織の中で、情報を集約する人、炊き出し用の釜や物資を地域の民家から運ぶ人、それを管理する人、不安な状況のなか避難者の話を聞く人など役割を決め、地域の顔なじ

みはもちろん、地域外の人でも、どこで、誰に、何を聞けば欲しい

情報が得られるかを分かるように体制を整えました。その結果、避難所内の災害対策本部のような機能を担えたのではないかな、と思つています。

小さな問題や混乱はどの避難所でもあると思いますが、大きな問題が出ずになんとか避難生活を乗り切ることができたと、あの日から二カ月が過ぎた今、ようやく落ち着いて振り返ることができたような気がしますね。

大切な日ごろの備え

今回は、日ごろから地域で防災活動を行ってきた成果を感じました。揺れが続いていたため、みんなが集まるまで時間はかかりましたが、防災訓練で確認をしていたから迷わず避難場所に集まることのできたし、災害用伝言ダイヤルの基本的な操作方法を事前に学んでいたため、実際に安否確認や被害状況確認に使った際も、操作に戸惑うことはありませんでした。今後も、あらゆる事態を想定した災害対策を考える予定です。

私たちの住んでいるところには、防災器具を置く倉庫がないので、緊急事態に備えて行政の施設を利用できるような制度を作っていただと助かります。

自主防災組織の声

古川北町北一町内会自主防災組織



左から、佐々木邦男さん、畠山典之さん、角張哲夫さん、佐藤篤さん